
忘れられた王国。

一柳 紘哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘れられた王国。

【Zコード】

N2401A

【作者名】

一柳 紘哉

【あらすじ】

これは、僕の物語で、間違いなくあいつの物語じゃない。この話は僕が僕であったときの話なんだ。長くなるかもしれない……短いと感じるかもしれない。そんな物語。いつか又、僕が戻ってきたら、きちんと真二のことを思い出せる僕になりたい。僕じゃなくなつても。

(前書き)

注意。とても簡単な性描写があります。

誰でもいいから。

忘れられた王国の話をしよう。

忘れられた王国は、一步踏み入れたら迷ってしまう森を深く深く進み、針のようにとがった山を越え、獅子もわが子を落とすのを躊躇う谷を越えたところに、小さな平原がある。その片隅にぽっかりとまるで井戸のような穴が開いている。

穴をのぞくと、丸く深い空洞になつていて、ポケットにぎりぎり入らないくらいの恐怖がわいてくるが打ち勝たなければならない。

その空洞の端にはじ「」があつて、それを下つていくと王国の城下町につく。

城下町には太陽の光はあまり届かなく、いつもなんだかジメジメしていく初めて訪れた人たちを思いつきり不快にさせる。

でも城下町に住んでる人たちは、

「なれねば気持ちがいいものよ。

逆に私たちが外に行くと体中の水分が飛んでつてミイラになつてしまふもの。もうここ以外のところではすめないわ。」

と、ポジティブに僕らを慰めてくれる。

もちろん彼らが外に出て行つたところがミイラになるはずがない。見たことはないけれども……

忘れてたけど、王国に着いたらまず門番に挨拶をして城下町に入るといい。もし挨拶をしないで入つてしまふと体中の毛を三万本剃られてしまうと聞いたことがあるから。

挨拶をして、疲れた体に鞭打つて城下町に入るんだ。

あと、気つけないルールみたいなものは、誰にも何も絶対に過去について質問しちゃいけないって事だ。

彼らは（王国に存在してる全てのモノは）思い出を忘れて生活してから、僕らが質問してしまうことで考えてしまう。

もしそれで彼らが思い出したりしたら大変だ。たちまちに跡形もなく消えちゃうからね。絶対に何にも質問しちゃいけないんだ。

城下町を抜けるとお城がある。星のような形をしたお城で、はじめ見て見たら金平糖と間違えて食べてしまうかもしない。

王様に会つのもやめたほうがいい。彼はおしゃべりがとっても大好きで、訪れた人はうっかり過去について質問したくなるから。

そう。その王国はこうして思つたままのことを思つたまま行動するというとても単純なシステムで成り立つてゐる。

しかし風のうわさで聞いたのだが、忘れられた王国は無くなつたらしい。

王国に何ヶ月か住んでいたとても親切な旅人が旅立つとき、王国の入り口である井戸のような丸い穴に向かつて

「ありがとうございます。おせわになりました。又きます」

と言つてしまつた。その声は反響して隕石が落下するよつて王国中に響き渡つた。

彼らは考える。この声はどこかで聞いたことがある。ああ彼のこえ
ダ――!!--\$%&, #) &
そうして消えてしまつた。

そして、誰も、何も無くなつた井戸の底のような場所から迷い込んだ蛙が空を見て喋る。

「太陽が西から昇る。」

僕は忘れられた王国のことを本当に覚えているの？
わかる分けない。だつて忘れられた王国なんだから。

ここまで長々と忘れられた王国について説明しておいてなんだが、
忘れてしまったものを説明しているわけだからもう少しうんфиクショ
ンなのだ。

でも、フィクションとゆう枠内で収まらせたくないんだ。
それらは僕の頭の中で固まつていき、はつきりと感じてしまつてゐる。
まるで、のどに詰まつた小骨のように頭の隅つこで騒いでる。

そんな、限りなくフィクションに近いノンフィクション。

だから、僕は忘れられた王国を忘れないために、吐き出した息をも
う一度吸い込む。

多分……この話はここから始まる。

そしてきれいな朝焼けとともに終わる。

そんな気がする。

P・M 10:32 同窓会会場 居酒屋

「よう。遅いぞお前

とりあえずビールでいいよな？」

僕の返事を聞かずに彰浩はバイトにビールを頼んだ。

二十畳はあるだろう居酒屋の宴会席には、ひしぐれ合ひついでたく
さんの人であふれている。

僕はとりあえず彰浩の隣に座り、田の前のテーブルに置いてある残
り少ない枝豆を口の中に放り投げる。

塩味がきつい。湯で加減が居酒屋にしてはまともで歯じたえはい
のに、味が濃いせいでぶち壊している。

すぐ田の前にあつた、誰のだかわからないビールで胃袋に流しいる。

テーブルには人の数以上の酒があつて、誰もが誰のものかわからない酒を飲んでいるので、勝手にこのビールを僕のものにする。飽食とゆう言葉がぴつたりだ。

ポケッツの中から煙草を取り出して火をつけようと周りに耳を傾ける。

懐かしい。久しぶり。今何してるの？

そんなありふれた会話がこの狭い空間の中でいたるといひで繰り広げられていて、その会話の波に乗ろうと糸口を探す。

いつだつてなるべく僕は自分から話しかけないようにしてゐる。自分から話しかけることで、時折僕は思つてもないことを言つてしまつ。湖に斧を投げ入れたら、貰つた金の斧で相手を殺してしまつよう相手を傷つけてしまつてゐることは知つてゐるし。困らせていることも知つてゐる。

だから僕はいつだつて聞き手に周るように努力している。話しやすいように簡単な笑顔を絶やさずにして、相手のことを考えて発言しようと心がけ、時折、奇想天外な答えを言つて周りを笑わせていれば暗い奴とも思われなくする。

「久しぶり。
ねえ覚えてる？」

力を入れたら壊れてしまいそうな印象を受ける子が、グラスを片手に僕の横に座り込む。

頼りない記憶を揺り動かして答える。

「芹沢陽子ちゃん！！久しぶりだね。だいぶ印象違うからびっくり

したよ

「そんな久しぶりってわけでもないじゃん。なに言つてんのよ」

ねえ、それでもやっぱり久しぶりだね。半年ぶりぐらいだよね。何してた？大学どこ行くの？それとも就職するの？なに飲んでるの？そんなたわいもない会話を、いつもどうり僕は聞き手にまわる。視界の端にビールを持った居酒屋の店員が見える。

「ビールお待たせしました。」

誰も反応しない。諦めたバイトがテーブルに置く。
芹沢がしゃべる。

ねえ誰が頼んだんだ？……もうつていいかな？
さあね。

僕は煙草をもみ消し、ビールを一気に飲み干してテーブルにドンと音がなるように置く。

ドン。

A・M 3:17 二次会 カラオケボックス

二次会のカラオケのトイレで汚物にまみれながら吐きまくる。飲みすぎた……

僕を心配してくれ、付き添ってくれた彰浩をみんなのところに帰らせてから、かれこれ十分以上も吐いている。

もう胃液しか出ないのに、なかなか溜飲が下がらない。便器を抱きながら喉元まであがってきた胃液を又吐ぐ。

アルコールのせいで睡魔も襲つてくる。このまま眠つてしまいそうだ。

「ねえ大丈夫なの？」

芹沢の声だ。睡魔のせいで夢か現実かわからないがとりあえず声を返す。

「大丈夫じゃない……」

芹沢だよね？ここ男子便なんだけど……」

「バカ、知ってるわよ。

だからできればすぐにでもその扉を開けて私を中に入れてほしいんだけど？

そうしないと介抱もできないし。

それに、変な女と思われるかオカマと思われるかっていう危ない橋渡つてるんだからね

それは危ない。僕はそう言つてふらふらと鍵をはずす。

芹沢は少しだけ扉を開けると滑り込むように中に入ってきて扉を閉めた。

僕は芹沢が中に入ってきたことによりトイレの中が狭くなってしまったから隅に座り直して、睡魔に逆らうことなく目をつぶった。ガチャリと乾いた音が僕の耳に届いた。鍵を閉めたのだろう。

「ほら寝ちゃダメよ。起きて」

芹沢が僕の頬を叩く。目を開けるとそこに顔があった。
苛立たしさもあつたしアルコールも入つてたから、芹沢の頭の後ろに手を回しキスをした。

「……口臭いよ」

「しょうがないだろ吐いてたんだから」

抵抗しなかつたので、何回も唇を奪つた。

何回目かわからなくなつてきたところで僕はゆつくり芹沢の服の隙間から手を入れた。

ゆうくりと胸を揉みながら僕は言う。

「さつき変な女と思われるかオカマと思われるかつて言つてたけど痴女に思われるが入つてなかつたね。

ノノノノノ !

と云ふたのその顔? 気持が悪いよ。

だつてをうだろ?

痴女って呼ばずになんて呼ぶんだよ。」

芹沢は僕にパンティーを下げられながら、消え入るような、悲痛な声で言う。

「馬鹿……」

又、思つてもないことを言つて切りつけてしまつたかな?
もつゞりでもいいや。

極力何も考へないようにして抵抗する彼女を抱いた。

A · M 5 : 16 二次会 カラオケボクツス前

5・16。携帯の液晶を見てもう一時間以上ボウっとしていた自分にきづく。

歌を歌う気にはなれなかつたから、僕は一人でカラオケの前の歩道

の脇に座っている。

タクシー や数台の車が僕の目の前を走っていく。ビルはまるで死んだように、眠っているかのように立ち並んでいて、その合間に抜けしていく雀の鳴き声で朝だと告げている。

朝は好きだ。だけど今日はいつものようにすがすがしい朝じゃない。

芹沢は何も言わずに出て行った。

行動には表してたけど、何も言わなかつた。

僕の腹を殴った。蹴った。泣いた。僕の体に爪を立てた。キスのときには僕の舌を拒んだ。

一つ一つ芹沢の行動を思い出しながら、煙草を取り出して口にくわえる。

火をつけることもしないで、だんだん唾液で濡れていく煙草を弄ぶ。

「おい！…芹沢に何しやがった！…」

彰浩がいつのまにか僕の前に立っている。

走り疲れているのか、起こっているのかは分からぬけど。肩で息をする彰浩がいつもより大きく見えた。

僕は言う。

「やつた

彰浩が僕の頬を殴る。

その衝撃で煙草が歩道に転がった。

「なに考えてんだよお前！…芹沢は真一の恋人だっただろ！…」

「真一？？真一って誰だ？？」

「真一って誰？？」

「お前マジでいつてんのかよ…」

彰浩が僕の服をつかみ無理やり立たせる。

「ふざけてーんだつたらいいよ…その遊びに乗っしゃるよ…」

真一だよ…真一…俺らの友達の…

お前の幼馴染の真一だよ…」

僕は分からぬ。本当に、いくら思い出しても真一なんて僕の記憶の中にはいない。

幼馴染？ いつたいなに言つてんだ。

知らない奴のためにこんなに怒る彰浩も知らない人みたいだ。

「彰浩。悪いけど本当に知らない。

幼馴染なんて僕にはないよ」

いい加減にしろよ。そうこつた彰浩は僕のみぞおちを殴つた。
倒れようとすると僕を許すことなく、彰浩はつかんだ僕の服でまた無理やり立たせる。

「確かにもつ真一はいない…半年前に死んだなあ…！
でもな幼馴染のお前が全部否定してどうするんだよ…！
真一がいなくなつて傷ついてる芹沢に何しやがつたんだよ…！
お前は…！」

半年前死んだ。

そうだ、僕は半年前、誰かの葬式に出た。

あの日は雨が降つて、濡れながら誰とも知られないよつて泣いた。
確かに僕は泣けるほど大事な人の葬式に出た。
「誰の？分からない。」

本当に？

ゆつくりと赤い口を広げた思い出が押し寄せる。

「あア—————@￥・＄%&、#)&」

「交代だよ。早く引っ込んで。」

「え？お前誰だよ？」

「忘れるわけないだろ彰浩。
ちゅつとふやけてただけだよ」

「まてよ、誰だよお前。」

何で僕の体にいるんだよ。何で僕の体で彰浩と会話してんだよ。

「これは僕のものだろ。お前誰だよ！—」

「彰浩！—こいつは僕じゃない！—」

「なに？聞こえない。もう何も聞こえないよ！—」

「なんだよ！—この真つ暗な場所は！—」

「まって、膨らむな！—どんどん場所がなくなつていいく！—

「ちょ落ちる！—落ちちゃう！—」

「あああああ—————！」

？？？？？ 暗闇 一本だけある街灯の下

あれからどれくらいたつたんだろう。もづ僕には考ふる氣力を起
こらない。
「こほどいまでも真っ暗。

この街灯を発見したときには希望があった。なにより明るいのが救いでもあった。

この街灯は僕の家の前に立っているのと同じ形。つまりどこにもあるよつた親しみがわく街灯で、ここにいれば家に帰れるんじゃないかと思つた。

そう思つてから、ずいぶんと時間がたつた気がする。
もういい加減諦めた。

「諦めたのかい？それは良かつた。やつと出発できるね。」

「誰？ああもう誰でもいい！姿をみしてくれ！！僕と会話してくれ！！

いい加減、気が狂いそうだ」

「姿を見せることも残念ながらできない。
ああ出発の用意をしようか」

僕は言つ。

「出発？何のこと？僕はこれからどう行くの？」

誰かは言つ。

「それは君も知ってるだろ？」「

僕は言つ。

「分からぬいよ……。教えてよ

「……君はこれから旅をするのさ。」

森を抜け、山を越え、谷を越えて行くのぞ。
目的地は分かるよね？」

背筋に冷たいものを感じる。
恐る恐る僕は答えを口づ。

「……忘れられた王国？」

「そう。大当たり。

今、現実世界で君をやっている君の元に行くのや
意味が分からぬなら簡単に説明しようか？」

「……お願い」

そう僕が言つた後、誰かは説明を始めた。

「簡単に説明すると、君の人格は一つ存在するんだ。
君を仮にAとするなら、今は君の違う人格Bにのつとられた状態だ
ね。

つまり、今君がいるのは君のもつ一つの人格Bの世界なんだ。
で、君が現実に帰る方法は一つある。

一つは、今、君の主の人格Bがうつかり未来について誰かと語り合
つたとき。

君と人格が交代する。

もう一つは、忘れられた王国……つまりBの中枢に行つてBの王国
を滅ぼしたとき。

君と人格が交代する。

そして……

僕は、まだしゃべつている誰かをさえぎつて言づ。

「とゆう事は、僕は大事な過去を思い出しちゃったからあいつと交代したって事？」

誰かは言つ。

「大当たり。

君が過去で、彼は未来がNGワードなんだ。
よくきずいたね。」

僕はまるで誰かが掃除したようなクリアな頭になっていた。
そのクリアな頭を使い、思い出す。
そして僕はすべてを思い出し、誰かに言つ。

「もう思い出したよ……君と会話するのもこれで五回目だ」

「だったら質問。王国を滅ぼすときのスペルはなんかい？」

「ありがとうございます。お世話をになりました。又きます」

「大当たり。

そうして王国のすべてに君がもつ一度来るつていう未来について考
えさせるんだ」

真っ暗でしかなかつた周りが突如として始まりの村に変わっていく。
気がついたら、わらぶきの屋根の家が両脇に立ち並ぶ砂利道に僕は
立っている。

まだ朝日が昇つていないのに、早起きな野良犬が畠のきゅうりにか
ぶりついている。

遠くに見える田んぼに立つ案山子が、お帰り、って言つてるみたい

だ。

僕は誰かに尋ねる。

「君は誰だい？もしかして君も僕なの？」

誰かは言ひ。

「さあ分からない。多分僕はアリスのチャシャーネコ見たいなものさ」

誰かがそう言い終わつた後、とつてもきれいな朝日が昇つてきた。
五回目にして始めてきずく。

なんて綺麗なんだろうと。

「もう行くね」

「うん。行つてらっしゃい」

うん。行つてらっしゃい。その言葉が僕の中でリフレインする。
目の前に広がる燃えるほど綺麗な朝焼けが、もう一人の僕が作り出
したものだと知つても。
綺麗には変わりない。

「太陽が西から昇る」

そう言い終わつた後、少しだけブルーになつて。

僕は歩き出した。

長い道のりの事を思い。

僕の王国の事を思いながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2401a/>

忘れられた王国。

2011年1月15日21時30分発行